（8）井上宗雄氏の『中世歌壇史の研究　南北朝期』（一九八七年、明治書院刊）を始め、通説は関東在住の廷臣一条能基のこととするが、疑問もある。『公卿補任』によれば、弘安八年の一月二十一日に能基は没しているので、東大本の「弘安九年十二月」はおかしい。

（9）弘安元年に「閏十二月」はない。「閏十二月」があるのは、東大本が言う弘安九年である。

（10）二〇〇〇年、笠間書院刊

（11）注8参照。

（12）『大和物語』の「心を取り」要約したというのか、『大和物語』、もしくはその登場人物が「心劣り」しているというのか、わからない。

（13）片桐洋一所蔵。『伊勢物語古注釈コレクション　第一巻』（一九九九年、和泉書院刊）所収。

（14）注4に同じ。

（片桐洋一）

片桐洋一（かたぎり・よういち）　【編集委員】
1931年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。大阪女子大学名誉教授。主要著書『伊勢物語の研究［研究篇］［資料篇］』（明治書院）『伊勢物語の新研究』（明治書院）『源氏物語以前』（笠間書院）

山本登朗（やまもと・とくろう）　【編集委員】
1949年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。関西大学教授。主要著書『伊勢物語論　文体・主題・享受』（笠間書院）『日本漢詩人選集・菅原道真』（共著・研文出版）『平安文学研究ハンドブック』（共編・和泉書院）

神田裕子（かんだ・ゆうこ）
1970年生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。早稲田大学大学院生。主要論文「河野美術館蔵『伊勢物語註　冷泉流』」（『王朝文学の本質と変容　散文編』和泉書院）「『玉水』の作品研究」（『演劇映像』第43号）「古活字本『謡抄』単辺十二行本の書誌学的研究」（『演劇研究センター紀要』III）

丸山愉佳子（まるやま・ゆかこ）
1976年生まれ。学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程在学中。主要論文「伊勢物語奥書集成稿（一）」（『国文学研究資料館文献資料部調査研究報告』第23号）「伊勢物語享受の実際　―伊勢物語版本についての報告」（『学習院大学国語国文学会誌』第46号）

伊勢物語古注釈大成（いせものがたりこちゅうしゃくたいせい）　第一巻

2004年（平成16）10月30日　初版第1刷発行©

片桐洋一・山本登朗　責任編集

装幀　右澤康之
発行者　池田つや子
発行所　有限会社**笠間書院**
〒101 0064　東京都千代田区猿楽町 2 2 5
☎ 03 3295-1331㈹　FAX03 3294-0996
振替00110-1 56002

NDC分類 913.32

ISBN4 305 70041-7 C3395
乱丁・落丁本はお取りかえいたします。
http://www.kasamashoin.co.jp

藤原印刷・渡辺製本
（本文用紙：中性紙使用）

増纂伊勢物語抄

冷泉家流

（鉄心斎文庫蔵）

片桐洋一
神田裕子
丸山愉佳子

伯父姪女の間なれは、人に聞ふれは恥かしとて、あわねは苦しと云也。武蔵鐙と云に、二の義あり。一には、『日本記』に云く、天智天皇の御時、軍あり、武蔵国より馬鞍を奉るに力革はなくして、鞍に鐙をくさり付たるあり。其一に鎖りつゝけたれとも、鐙と鞍は、別の物也。后と業平は、したしき人なれとも、氏は別の人也と云意也。音もせすとは、其後に音信もせさりけるを云也。女の歌の意は、武蔵鐙のことくに、氏の一に鎖りけれは、さすかにかけて思はるれは、問ぬもつらし、又、舅姪女の間にては、問もうるさしと読也。返歌義なし。二には、武蔵鐙と云事、『日本記』に云く、是は恋に云事也。むかし、称徳天皇の御時、橘安喜丸と云人、武蔵国に下て住けり。彼国の女を思けるか、京へ上るとて、形見に鐙をとらせて上りけり。此女鐙を夜はいたきてねけるか、女死して後、彼鐙、土に落て生付て木と成。此木西の方へなひき、夜人の聞は常に泣声あり。今に鐙木とて有。其木の如に、常に君か方へ我もなひきて泣と云意也。然とも、実義は上の義か。

追、武蔵鐙はさしたる物なれは、さすとつゝくるなり。かけてとは、鐙はかくる物なれは云くたす也。此后と業

十二

第十二

一　人の娘を盗てとは、長良の中納言奈良に住給し時、二条后未内裏へも参給はて、卜定の女御にて親の許に座を、業平盗て、春日野の中、武蔵塚へ行也。国の守とは、長良、于時大和守也。からめられけるとは、后を被レ返レ取、辛日をみせらるゝと云義也。

追、『朱雀院の髄脳』に云、中将の仕しける源蔵人守承と、武蔵権守藤原の長后とかとらへられたるを、世の人しらて中将のとらへ搦られたりと云り。上の義の如ならは、誰も不搦賊。満て来人とは、后を尋奉て来る人也。歌は如『古今』云。

十三

第十三

一　武蔵なる男とは、有常、武蔵守たりし時、業平彼聟にて、武蔵守か許に居たるを云。京なる女とは、我めい、四条后の御事也。聞ふれははつかし、聞えねはくるしとは、平とは舅めいの中なれは、問ぬもうたてしく、問るゝもはつかし。されはさすかにかけて思とよめり。さすかにかけてといはん為に、武蔵鐙と云也。彼鐙は、木鐙也。されは、さすと云也。さすとは、木にて造義也。昔は皆金にて、いたる也。今の木鐙は、武蔵国より造出せる也。されは、木鐙をは武蔵鐙と云也。異説如是。

十四

第十四

一　陸奥にすゝろにいきけるとは、長良陸奥の国司になりし時、大原の内に栗原あねはの谷と云所に住給ひしかは、二条后未定にて親の許に御座しける時、業平通ふ也。そこなる女とは、后なり。京の人はめつらかにや思ひけんとは、業平か京よりくるをは珍とや思けんと云也。中々に恋にしなすはとは、なからへて恋に死なすはと云義也。くはことは、蚕也。かひこの、ひいると成ては、つるむより外の事なし。其様に命計たにいきたらはかひこに成てんと云也。此歌は、『万葉』の七巻の歌也。其を二条后の詠し給ふ也。是は田上の黒木か女の許へ読て遣す歌と云り。

追、くはことは、玉也。瑰珀とかけり。松根の千年をへて後に、河に流て千年、又海に入て千年、三千年を経て、玉と成なり。されは、久敷物なれは、君をかの玉になして、我玉の緒と成て、彼玉をつなぬきたるやうに、君にそははやとよめり。此義如何。此義もさのみのきては不聞。

歌さへそひなひたりけるとは、さこそ田舎のくり原に住からに、歌さへいなかめきたると云也。田舎をひなと云事、如『古今』。夜ふかく出にけりとは、業平京に行を云也。歌にきつにはめなてとは、夜も明は此鶏を狐にはませて、夜深く鳴て夫とやりつるとよめり。家隆云、きつとは馬船を云也。されは、夜明たらは此鶏を馬船にうちはめてをかてと云也。馬舟をきつと云事、東詞也。くたかけとは、鶏を云也。如『古今』。家隆云、くたかけとは、少き家の鶏と云ふ。くたとは、少の義也。くたかけと云心也。かは、家、けは鶏也。家の義、(ヒ家流ノ事)不然。只くたを切懸たる故に、鶏をくたかけと云なり。行家には、ひよ〳〵の鳴を聞てよめると云也。少鶏と書りと云ふ。されは少き鶏はひよ〳〵なり。鶏はかけと鳴は、くたかけとは少鶏と書と云り。常(ヒ蔵)

流には、不然。男をせなに云事、『万葉』云、

夜毛曙波狐丹食畢倶達懸之未丹鳴天勢男遣津留

又、云、

信乃路之薄井之山丹勢男波有登黒河野辺丹我波有哉

是は昔、夫婦別々の所に住ける時、女の読て遣す歌といへり。されは、せなとは、男也。栗原の歌は如『古今』云。追、栗原やあねはを歌は、みち国栗原にあねはの松とてうつくしき松の有也。其松のやうに后の御心もときはに色もかはらす。都へくして行奉らんと読り。今、又、后の住給ふ所も大原の内くりはらあねはのやつと云所なれは、よそへ読也。思けらしと云をりけりとは、后の、業平は我を思けりと云也。

十五

第十五

一　みちの国にて、なんてうことなき人の女にとは、長良の陸奥守にて大原に住し時の事也。なんてうことなきとは、何と云事無と云事也。人の妻とは、彼后は、清和の妻也と云心也。我かく通ともしらねは、何と云事もいはぬ人の妻にと云心也。あやしうさやうにて有へき女とも非とは、益有てさやうに始終可通女にも非と云意也。歌に義なし。さるさかなきとは、かゝる后の身にて有を犯せは、ふるまひなき事を見ては、夫もたのまれすと云也。『老子経』云、仁義礼智信の五常は、世の人の行云り。されは、さかはふるまひ也。さかなきとは、振舞無と云義也。ゑひす心とは、ゑひすは物を取つめてはなたぬ意あり。其かやうに、后の身にて有を、取つめてはなたぬは、ゑひす意のある人也と云也。

十六

第十六

一　有常、三代の御門につかふまつりけるとは、淳和、仁明、文徳、是を三代の御門と云ふ。時にあへりけるとは、さかへたるを云なり。『伯選』云く、帝王恵普臣下相時一道也と云り。是、賢王の時は、臣下の栄を云ふ。有常か親三条大納言紀名虎、淳和仁明二代之後見として、有常も随て栄へ、文徳の御代に名虎薨して、贈太政大臣と成。此時、紀有常、小納言にして為天下之後見。清和の時に至て、忠仁公、世を取り給ふ故に、有常は不宮仕、大和国に籠居したり。其を代替時遷とは云也。世の常の人如も非すとは、貧きを云也。あてやかなる事をのみ好とは、やさしき事のみ好を云也。世の常の事も知らすとは、世間の栄をも知らすと云也。年来あひなれたる妻とは、良門か娘也。とこはなれとは、次第にうとく成を云ふ。つゐに尼に成とは、彼女の姉皇后宮の中納言局とて、文徳天皇に仕へりしか、出家して大原に籠居たる所へ行て、道心を発して彼妻も出家しぬ。其を尼に成て、姉のさきたちて成所へ行と云なり。誠にむつましき事にこそなかりけれとは、我を捨て行は、むつましき事なかりけれと云なり。する態もなしとは、物なんともとらせぬを云也。懇にあひかたらふ友達とは、業平也。歌の心は、四十年か間、あひつれたりと云心也。よる物とは、夜の衣を送るなり。返歌の心は、年たにも四十年相つれたるに、幾度か契つらんと云心也。是やこの歌に、天の羽衣とは、業平殿上に仕れは、殿上人の衣の義をあまの羽衣と云也。むへしこそとは、宜と云義也。みけしとは、御上衣と書り。されは、是は君か召ける上の衣にてこそ有らめと云ふ心也。秋やく也の歌、無義。

十七

第十七

一　年来音信さりける人とは、貞観十三年の花盛に、京へ行たりしか、二条の后の事により、三年の東山に被押籠て、有常か娘の許へも行す三年と云。貞観十五年の春、勅勘許て有常か娘の許へ行たりけるを、年来音信ぬ人の花盛に来とは云也。歌の心は、桜は七日に開散と云、あたなる名はかりなり。をとゝしも此花に別たりし人を待て、今年も此人のいたる時、又盛りと云。返事の心は、けふこすは此花明日は雪のことくにふりなまし。縦庭に消すとも花とは見しと読なり。

十八

第十八

一　なま心ある女とは、小野小町なり。なま心とは、やさしき心也。好心と書り。『長能か記』云、貫之者得和歌之体、有好心、其詞美と云り。されは、なま心とは、よき心也。男ちかて有けりとは、業平も同御内に有て、文徳に仕